幼なじみに買い取られた私
――専属契約から始まる歪んだ愛欲

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話

北海道・小樽の冬の朝。
港町に連なる坂道は夜の冷え込みで凍りつき、白い石畳のように光を反射していた。
足を踏みしめるたび、きゅっきゅっ、と雪が鳴る。
人影はまばらで、遠くから響く除雪車の低い唸りだけが凍てついた町の静けさに溶け込んでいた。

そんな寒さの中、美紅は今日も歩いていた。
向かう先は、腐れ縁の工藤涼の家。
本当は、こんなお迎えなどしたくない。
けれど美紅の母と涼の母は昔からの知り合いで、家族ぐるみの付き合いをしている。

……いや、ただの知り合いでは済まされない。
涼の父親は働きもせず借金を重ね、ある日ふらりと姿を消した。
そのせいで涼の母は朝から晩まで働きづめだった。
それでも生活は追いつかないのだろう、何度も美紅の母に頭を下げ金を借りに来ていた。
美紅は台所で母が封筒を差し出し、涼の母が何度も頭を下げる光景を子どもの頃から繰り返し目にしてきた。
にもかかわらず肝心の涼は学校ではフラフラし、アルバイトもせず勉強もしなかった。
朝は自分で起きられず、美紅が迎えに行かなければいつまでも布団に潜り込んだまま。
「美紅、ちゃんと涼くん起こして学校に連れてってあげなさいよ。あちらのお母さん、いつも忙しいんだから」
母にそう頼まれるのも、もう日課になってしまった。

「……なんで美紅がこんなことせにゃならんの」
吐く息と一緒に、愚痴が白く空に溶けていく。

涼の家のチャイムを押す。返事は、いつものようにない。
「涼！　早く起きなさいってば！」
美紅は勝手に玄関を開けて、二階へ上がっていく。
これも毎日のように繰り返してきたことだった。
ドアを開けると、むっとする空気とともに、散らかり放題の部屋が広がる。
ギターが無造作に立てかけられ、楽譜やノートが床に散乱。
机の上には空のペットボトルや菓子袋が転がり、ベッドの横にはえっちな本やビデオまで堂々と放置されていた。
「……サイテー」
呆れながら布団に近づき、声をかける。

「涼！　起きなさいってば！」
返事はなく、寝息だけが返ってきた。
大きく溜め息をつき、美紅は布団を思い切りはがす。
目に飛び込んできたのは、盛り上がった下半身。
無防備な寝顔のまま、涼は堂々と朝立ちしていた。
「ん……あー……美紅か」
寝ぼけ眼でこちらを見上げる涼。
「ちょっ……ちょっと！　な……！」
「はぁ？　朝はこういうもんなんだよ。普通だろ」
「……っ！　早く制服着て用意しなさい！」
思わず声が裏返る。
涼はへらっと笑い、悪びれもせず頭をかいた。
「へいへい、わかったわかった」
数分後、制服姿に着替えた涼と一緒に家を出る。

白い息を吐きながら坂道を下ると、いつものように川にかかる小さな橋が見えてきた。
その橋の上で美紅は足を止め、毎朝の習慣のように涼のマフラーを巻き直す。
「ほんとだらしない。なんで美紅がこんなことせにゃならんの」
「母ちゃん同士仲いいだろ？　ありがたーく思ってまーす」
「またふざけた言い方して！」

並んで雪道を歩きながら、美紅は横目で涼をにらんだ。
「そういえばアンタ高校どこにするの。そろそろ願書出さなきゃ」
涼はポケットに手を突っ込み、ふっと白い息を吐いた。
「……俺、高校行かない」
「は？」
「中学卒業したら東京行く」

視線をどこかに逸らし、淡々と言い放った。
「なにそれ……意味わかんないんだけど」
「俺、ミュージシャンになるんだ。バンド組んで大きなステージに立って、テレビにも出て……」
美紅は鼻で笑った。
「はぁ？　バカじゃないの。何夢みたいなこと言ってんの？」
雪を蹴り飛ばす。
「アンタのお母さんがどれだけ大変か知らないの⁉」
声が強くなる。
「毎日働きづめで、足りない分はうちのママに借りに来て……
美紅、ずっと見てきたんだから」
涼は黙り込み、歩調を落とした。
「なのに、アンタはバイトも勉強もせずにフラフラして、高校にも行かないなんて言って」

雪道に美紅の足跡だけが並んでいく。
「朝だって自分で起きられなくて美紅が迎えに行かなきゃ動きもしないくせに」
そこでようやく振り返った。
「そんなアンタが東京行ってミュージシャン？　テレビ出る？　笑わせないでよね」
涼の拳がポケットの中で握りしめられる。
「……本気だって言ってんだろ」
「はいはい、“夢”ね」
美紅は肩をすくめる。
「じゃあ、美紅の夢はなんなんだよっ？」
涼が食い下がる。
「夢じゃないわ」
美紅は短く返す。

「現実よ」
「……は？」
「美紅は弁護士になる」
雪を踏みしめながら言った。
「高校行って、大学行って。努力すれば必ず叶うの」
横目で涼を見やる。
「アンタの“夢”とは違う」
涼は唇をかみ、言葉を失った。

雪を踏みしめる音だけが、二人の間に響く。
冷たい風が吹き抜けても、涼はもう何も言わなかった。
その会話を最後に、二人の間には埋めがたい溝ができた。
一緒に歩くはずだった坂道も、気づけば別々の道へと続いていく。
季節は巡り、雪は解け、やがて春が訪れる。

そして卒業の日。
春のはずなのに、小樽の校庭にはまだ白い雪が残っていた。
体育館には拍手と歓声が響き渡り、胸元に飾られた赤い花がなぜか少し重たく感じられる。
式が終わると校庭には記念撮影をする生徒や先生に挨拶する保護者の姿があふれ出した。
校門近くでは、学ラン姿の涼が後輩の女子たちに囲まれていた。
「先輩、そのボタンください！」
「えー、私も欲しい！」
後輩たちは目を輝かせながら、黄色い声をあげる。
涼は照れながらも笑みを浮かべ、その輪の中心に立っていた。
だらしなくて、勉強もできない――そんな姿しか知らない美紅から見れば信じがたい光景だったが、彼女たちにとって涼は憧れのカッコイイ先輩なのだろう。

一方で美紅は、同じクラスの友人たちに囲まれていた。
「すごいね！　北南高校に受かったんでしょ？　頭いいよね～！」
「将来は弁護士かあ。がんばってね！」
肩を叩かれ、笑顔を返す。
胸の奥に、少し誇らしい気持ちが広がっていった。

ふと顔を上げると、後輩に囲まれる涼と視線が交わった。
ほんの一瞬――けれど、すぐにお互い目をそらす。
声をかけることも、手を振ることもなく。
あの日以来、朝のお迎えに行くこともなくなっていた。

同じ小樽で育ちながら、現実を選んだ美紅と、夢に賭けた涼。
気づけば二人は、まったく違う未来を目指していた。

第二話

美紅は、地元・小樽の高校でも常に上位の成績を収め、東京の有名大学法学部にストレートで合格した。
弁護士を目指し、一つの講義も欠かさず、几帳面にノートを取り、課題も完璧に仕上げた。
図書館で六法全書を広げることが美紅の日常の一部となっていた。

そんな日々の中で出会ったのが、彼だった。
同じ学部に通う同級生。
美紅にとって――人生で初めての彼氏。
「一緒に弁護士になろう」と励まし合い共に努力する仲間だった。
真面目に勉強に向き合っていた頃の彼は、確かに眩しく見えた。
美紅は心から彼を信じ「この人となら」と未来を思い描いた。

けれど、その輝きは長くは続かなかった。
小さなつまずきで彼は簡単に折れた。
試験で思うように点が取れなかった日から酒に逃げ、講義を欠席しやがてはギャンブルへと溺れていった。
酔えば暴力を振るい、時には美紅にレイプまがいのことさえした。
泣きながらも美紅は「本当は優しい人だから」と自分に言い聞かせ見捨てられずにいた。
初めて好きになった人、初めて心も身体も許した相手だからこそ、簡単に手放せなかった。
「美紅、頼む……もう少しだけ助けてくれ」
その言葉に、何度も縛られた。
いつの間にか彼は美紅の部屋に転がり込み、生活費も学費も美紅が背負うようになっていた。
当然、勉強に集中できるはずもない。

課題は遅れ、勉強も身が入らず、美紅はついに留年してしまった。
普通のアルバイトでは到底返せない額の借金。
追い詰められた美紅は、夜の世界に足を踏み入れる。

最初は水商売だった。
慣れないドレスを着て、男たちに笑顔を見せ、グラスを満たす。
けれど出勤できるのは週に数日。
とても借金を埋められるほどの収入にはならない。
「一度で大金を稼げるなら……」
そう自分に言い訳しながら、美紅はついに風俗嬢となった。
プライドを捨て、羞恥を押し殺し、心を固く閉ざして働いた。
だが、結末はあまりにも呆気なかった。
彼は借金を美紅に押し付けたまま別の女を作り、姿を消した。
残されたのは、美紅名義の借金と、擦り切れた身体。

それでも美紅は大学を辞めなかった。
たとえ留年しても、弁護士になる夢だけは手放せなかったからだ。
昼は講義に出てレポートを書き、夜はホテルのドアを開ける。

――もう優等生でも真面目な子でもない。
ただの風俗嬢であり、留年した大学生。
小樽で毎朝幼なじみの涼を迎えに行き、マフラーを直してやった頃の自分が遠い夢のように思えた。

第三話

六本木の街に異世界のようにそびえ立つ高層ホテル。
外壁はガラス張りで、煌めく夜の灯りを映し返し、エントランスには赤い絨毯が敷かれ、制服姿のドアマンが控えている。
これまで何度も足を運んできた安っぽいビジネスホテルとは明らかに格が違った。
美紅は足を止め、思わず小さな声でつぶやく。
「……すごいホテル……」
その豪華さは、美紅の場違いさを否応なく際立たせていた。
胸の奥にひやりとした緊張が広がり逃げ出したい衝動に駆られる。
「……普通のお客さんだといいな」
いつものくたびれた廊下ではなく、厚いカーペットにヒールが沈み込む静かなフロア。

形ばかりの明るい笑顔を作り、深呼吸してからドアをノックした。
扉が開いた瞬間、美紅は息を呑んだ。
そこに立っていたのは――工藤涼。

心臓が一瞬止まったように感じた。
小樽の雪の中で、寝癖だらけの髪をかきながら大きなあくびをしていた、あのだらしない少年ではない。
髪はきちんと整えられ、痩せた輪郭には鋭さが宿り、黒いシャツの胸元から覗く筋肉が男らしさを際立たせている。
間違いなく、成長した涼――かつての幼なじみだった。
「……お前……増田、美紅？」
涼の目が驚きに大きく見開かれる。
「な、なんで……」
言葉が喉に張りつき、声にならない。

よりにもよって、こんな形で再会するなんて。
どうしてモニターで確認したとき、気づけなかったんだろう。
知り合いならばNGを出せたのに。
ほんの一瞬でも、あの輪郭を思い出せていたら。

涼の視線が、美紅を真っ直ぐに射抜く。
かつて優等生と呼ばれた少女が、今や風俗嬢として立っている。
その落差が容赦なく突きつけられるようで、視線が痛い。
「……お前、弁護士になるって、言ってなかったっけ？」
低く落ちた声に、胸がぎゅっと締めつけられる。
美紅は下を向き、唇を噛みしめ、何も答えられなかった。
「……アンタこそ、なんでこんなところに」
かろうじて絞り出した声に、涼は鼻で笑う。
「なんでって……ライブの後だから、眠れなくてな」

「ライブ……？」
「俺、そこそこ有名になったんだぜ。……全然知らねえの？」
テレビも音楽番組もほとんど見なくなった美紅には、涼がどれほど有名になっているのか、本当にわからなかった。
「……知らなかった」
しぼり出すように答えると、涼は呆れたように笑った。
「ほんと、変わんねえな、美紅」
気まずい沈黙が落ちる。
美紅は何も言えず、ただその場に立ち尽くしてしまった。
すると涼が大きく息を吐き、軽く肩をすくめる。
「……まあいいや。さっさと入れよ」
そう言って、美紅の手をぐいと引いた。
抗う間もなく、部屋の中へ足を踏み入れてしまう。
真新しいシーツが柔らかな光を受けて輝く、大きなベッド。

壁際には間接照明が穏やかに灯り、まるで空気そのものが淡く光を帯びているかのように、室内全体を包み込んでいた。
落ち着きと華やかさを兼ね備えたその空間はいつもの薄暗いホテルの一室とは比べものにならないほど洗練されていた。

涼は椅子に腰掛け、腕を組んだままじっと美紅を見つめる。
昔を知る涼だからこそ、その視線はなおさら痛烈に感じられた。
美紅は震える指先で予約表を開き一行一行に視線を滑らせる。
コスプレ。フェラ。ごっくん。……素股。
――本当に、これを涼に……？
思考が途切れ、頭の中が真っ白に塗りつぶされた。
沈黙を破ったのは、涼の無造作な声だった。
「俺、時間ないんだよ。……早くしてくれる？」
そこにいるのは、もう幼なじみではなく――ただの客だった。

「……さっさと脱げよ」
短く放たれた命令に、思わず肩が震えた。
「ちょ、ちょっと……ねぇ、やめにしない？　だって、こんなの変じゃん。私たち、昔からの知り合いなんだよ……。チェンジでいいでしょ？　別の子に――」
必死の訴えを、涼は鼻で笑って切り捨てた。
「いや、チェンジはしない」
「……え」
力なく声を漏らす美紅を、涼は容赦なく追い詰めた。
「ごちゃごちゃ言ってねぇで……さっさと脱げ。お前、風俗嬢なんだろ？　俺は金払ってんだ。仕事しろよ」
嫌悪と屈辱に身体が強張り、喉がきゅうと締め付けられる。
逃げたい、拒みたい。
だが、涼の鋭い視線に射抜かれると、足がすくんで動けなかった。

震える指で上着のボタンに触れる。
ひとつ、またひとつと外すたび、嫌悪感に身を竦ませる。
布の隙間から覗く素肌に、涼の視線がいやらしく絡みつき、皮膚を焼くように突き刺さる。
その一瞬一瞬が、息苦しいほどの苦痛だった。
スカートのファスナーを下ろし、タイツを脱ぐ。
布が床に落ちる音と重なるように、涼の喉がごくりと鳴った。
やがてブラとショーツだけの姿になると美紅は思わず両手で胸元を覆った。
すぐさま冷たい声が落ちる。
「隠すな。……全部見せろ」
観念したようにブラのホックを外す。
布が滑り落ちた瞬間、冷気に触れた乳首がきゅっと硬くなった。
震える手でショーツを下ろすと涼の目が細められ、熱を帯びる。

「……こんな身体してたのか」
その一言で顔が燃える。
羞恥で胸が激しく脈打ち、息が詰まりそうだった。
「……舐めろ」
低く響いた命令が、美紅の背筋を這い上がり、全身を震わせた。
おずおずと膝をつき、指先で涼のベルトを外す。
ジッパーを下ろした瞬間むわっとした熱気と生臭い匂いが立ち上り
喉がひゅっと鳴った。
恐る恐る唇をすぼめ、先端に触れる。
舌先でちろちろと舐めるたび、涼の呼吸が乱れるのがわかる。
「……先っぽばっか舐めてんじゃねえよ。奥まで咥えろ」
次の瞬間、髪をぐっと掴まれ、一気に喉奥へ突き込まれる。
「んぐっ……！　んぶっ……！」
容赦なく押し広げられた口の中で、熱く脈打つ肉棒が喉をずるずる

と擦り上げる。
涼は髪を握ったまま、美紅の頭を前後に勝手に揺さぶった。
「ごぼっ、ごぼっ、ごぼっ……！」
泡混じりの唾液が喉奥で鳴り、窒息しかけて涙が滲む。
濡れた音がいやらしく響き、全身が羞恥に震えた。
「……俺から目、逸らすなよ」
涙があふれ、視界がにじむ中、必死に上目遣いで涼を見上げる。
濡れた瞳の奥に、涼の顔が揺らいで映った。
ぐちゅぐちゅと喉の奥まで突き入れられ、舌は無理やり根元まで擦り付けられる。
「んぶっ……！　んぐっ……！」
喉をえぐるたびに、ごぼごぼと卑猥な音が鳴り響く。
美紅はただ肉棒の道具として使われ、呼吸を奪われながら必死に喉を締め付け続けた。

「……っ、俺の目を見ながら飲め」
低い声と同時に、喉奥で熱が弾ける。
「んんっ……！　んぐっ……！」
濃厚な精液が容赦なく注ぎ込まれた。
ごぼごぼと喉を鳴らしながら、涙に濡れた瞳で涼を見上げ、必死に喉を動かして飲み下した。
「……ははっ、昔のガリ勉優等生が、今は俺の精子をごっくんか」
嘲る声が頭上から降り注ぐ。
顎から垂れる精液を拭うことも許されず、美紅はただ震えながら、床に膝をつき、喉を上下させた。

「次は……これ着ろ」
涼が投げてよこした袋の中には、セーラー服が入っていた。
中学時代の制服に驚くほど似ている。

「これ……まさか」
声が震える。
「コスプレオプション……さっさと着ろ」
美紅は羞恥に頬を染めながらも、震える手でスカートを広げた。
「……やめてよ、見ないで」
「見るに決まってんだろ。……客だからな」
制服に袖を通し、スカートを腰に合わせていく。
鏡に映るのは、大人の身体をしたセーラー服姿の自分。
胸元はボタンを閉めても張りつめ、脚は当時よりもはるかに艶やかだった。
涼の目がいやらしく這う。
「顔は中学のときのまんま変わんねえのに体だけはずいぶんエロく育ったな」
次の瞬間、肩を突き飛ばされ、ベッドに仰向けに倒された。

「きゃっ……！」
抵抗する間もなく、涼の手が両脚をつかんで強引に開かされる。
「やめて……っ、こんなの……」
「うるせぇな」
涼の視線が、隠しようのない部分をいやらしく舐め回す。
「……お前、なんでパイパンなんだよ。ツルツルじゃん」
喉の奥で笑いながら、まじまじと凝視する。
「風俗嬢の割にはピンクで綺麗じゃん……やべえな」
「っ……見ないで……！」
その瞬間、冷たい液体が肌に落ちる。
「ひゃんっ……！」
美紅の腰がびくりと跳ねた。
涼はその反応に笑い、指先でローションを雑に塗り広げる。
ぬるりとした感触が割れ目に広がり、その上から熱を帯びた硬さが

押し当てられる。
「やっ……！」
思わず声が裏返る。
亀頭が膣口に密着し、ぬるりと擦り上げる。
くちゅ、くちゅっ……卑猥な音が部屋に響く。
正常位で覆いかぶさる涼の顔が、すぐ目の前にあった。
荒い吐息が頬をかすめ、互いの汗と熱が混じり合う。
「……はぁ、はぁ……くっそ気持ちいい……」
涼の喉から低い吐息が漏れる。
硬い先端を割れ目に擦りつけられるたび、美紅の全身が跳ねる。
「やっ……そんな……擦ったら……っ、あっ……！」
蜜が溢れ、ローションと混ざってとろとろに濡れ広がる。
先端がクリトリスをかすめるたび、視界が白く弾けそうになった。
「ダメっ……あぁっ、イッちゃ……う……！」

腰が勝手に震え、爪先が丸まる。
まだ挿入もされていないのに、絶頂へ追い込まれていく。
「おい……なに勝手にイってんだよ」
涼の声が耳元で低く響く。
意地悪そうに笑いながら、さらに腰を押しつけてきた。
「ひっ……あっ……！」
亀頭が、ほんのわずかに割れ目に沈み込もうとする。
「やっ……ダメっ……！　入れちゃダメぇ……っ！」
涙声で必死に懇願する美紅。
涼は荒い息を吐きながら、唇を耳元に寄せて囁いた。
「……ちょっとくらい、いいだろ。こんなに濡らしてんだから」
「やっ……ダメっ……ダメだってば……！」
美紅の腰は小刻みに震え、涙がこぼれ落ちる。
亀頭が割れ目をなぞり浅く押し込まれるたび卑猥な音が重なった。

ぬるぬるとした蜜とローションが混じり、肉と肉が擦れ合う音は、いやらしさを増していく。
最初はゆっくりと押し当てるだけだった動きが美紅の身体がびくんと反応するたびに自然と速くなっていった。
くちゅっ……ぐちゅっ……
「ひっ……あぁ……っ！　あっ……！」
声は高く裏返り、涙に濡れた顔が羞恥で赤く染まっていった。
涼の吐息は荒く熱を帯びる。
浅く出入りする腰の動きは、やがてリズムを増していく。
ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅっ……。
正常位の至近距離で顔を重ねながら、涼は腰を動かし続けた。
美紅はただその瞳を見上げ、涙をためながら喘ぎ声を漏らす。
「やっ……もう……ダメ……！」
腰を震わせるたび、蜜があふれてシーツを濡らしていく。

「おい……まだ入れてねえぞ……」
嘲るように囁きながら涼はさらに速くさらに深く擦りつけてきた。
「んあっ……！　あっ……あっ……ダメっ……イッちゃう……！」
ピストンの速さが一気に加速し、互いの息が荒く絡み合う。
美紅は必死に脚を閉じようとするが、涼の腕に押さえつけられ逃げられない。
亀頭が膣口をかすめるたび、まるで挿入されているかのような錯覚に陥った。
「……っ、やべぇ……出る……」
涼の声が低く唸る。
次の瞬間、熱いものが美紅の口元に押しつけられた。
「……飲め」
抗う暇もなく、頭を掴まれて口を開かされる。
どろりとした熱が喉奥に一気に流し込まれた。

「んんっ……！　んぐっ……ごぼっ……！」
濃厚な精液が容赦なく注ぎ込まれ、呼吸が奪われる。
涙がぽろぽろと零れ落ち、上目遣いのまま必死に飲み下す。
だが量が多すぎて口端から白濁があふれ、顎を伝って滴り落ちる。
「……はぁ、はぁ……おら、こぼさずに全部飲めよ」
嘲るような言葉が頭上から降る。
羞恥と快感と絶望がないまぜになり、全身を支配する。
――幼馴染の前で、こんな姿を晒す日が来るなんて。
セーラー服のまま、冷たい視線に貫かれながら、美紅はただ惨めに喉を動かし続けていた。

第四話

大学の図書館。
分厚い六法全書に視線を走らせながら美紅は深くため息をついた。
明日の追試、絶対に落とせない。
焦りばかりが募り、胸が締めつけられる。
「……美紅ちゃん、隣いい？」
ふいに声をかけられ、顔を上げると、同じゼミの加奈子が参考書を抱えて立っていた。
「……うん、どうぞ」
美紅がうなずくと、加奈子は「ありがとう」と笑って椅子を引き、隣に腰を下ろした。
「なんだか全然集中できなくてさ。美紅ちゃんって、いつもここで頑張ってるでしょ？　そういう人の近くにいたら、私も少しは集中

できる気がして……。お邪魔させてもらうね」
「……そんな、大げさだよ」
照れくさく否定するものの、胸の奥がわずかに温かくなる。

加奈子は机の上に筆箱を置き、ペンを取り出そうとした。
その瞬間、美紅の視線が釘付けになる。
（……RYO KUDOって、書いてある？）
カラフルなロゴが印刷されたペン。
思わず指で示し、問いかける。
「それ……なに？」
「あ、これ？」
加奈子は誇らしげに掲げて見せた。
「涼くんのグッズだよ。この間ライブで買ったの。会場限定でさ、すぐ売り切れちゃったんだよ」

「……工藤涼……」
胸がひゅっと縮む。
「めっちゃかっこいいよね！歌もうまいし！」
声が詰まる。
「ツアーも即完売でしょ、次のライブチケット取れるかなあ？」
「……う、うん、どうだろね……」
胸の奥がざわつき、目の前の文字が霞んでいく。
「……ごめんね、ちょっと外の空気吸ってくる」
そう言い残して席を立つ。
図書館の自動ドアを抜けた瞬間、冷たい風が頬を撫でた。
忘れようとしてたアイツ、涼。
もう絶対、二度と会いたくない。
人気のない階段に腰を下ろし勤め先のデリヘル店の番号を押す。
耳に響くコール音がやけに長く感じられた。

やがて店長の低い声が応答する。
「……あの、こないだの工藤涼って人、NGにしてください。あと今日なんですけど、勉強があって……お休みさせてください」
受話口から返ってきたのは、呆れ混じりのため息だった。
「また休むのかよ、今こっちから連絡しようと思ってたとこだ」
「え……？」
「今日な、お前また指名入ってるんだよ。……その工藤涼から」
胸の奥が大きくざわめいた。
「……そ、その人！　NGにしてください！　お願いします！」
食い気味に訴えると、受話器の向こうで短く乾いた笑いが響いた。
「はあ？　何言ってんだ。お前の借金、あの人が全部払ってくれたんだぞ」
「……えっ？」
「NGどころか、もう専属契約だよ。呼ばれたら必ず行け」

血の気が一気に引いていく。
「勝手に……そんなの勝手に決めないでください！」
「勝手に？　お前、ウチに借金してんの忘れたのかよ！　週一回は必ず出勤するって約束も守らねえし」
店長の声は次第に低く強まり、突き放すように響いた。
「こっちだって慈善事業じゃねえんだよ。ポンと一気に三百万も出してくれる客がいたら、飛びつくに決まってんだろ」
言葉を失った。
喉の奥が乾き、呼吸すら苦しい。
「とにかく今日は呼ばれてる。時間までに必ず行け」
通話は一方的に切られた。
スマホを握りしめたまま美紅は震える唇を噛みしめた。
悔しさと情けなさに、涙がにじんだ。

第五話

ホテルの部屋に入ると、涼はソファで脚を組んで待っていた。
冷たい瞳がまっすぐ美紅を射抜く。
「……来たな」
低く落とされた声に、全身がこわばる。
美紅は怒りを隠さずに声を荒げた。
「なんで……なんで勝手なことするのよ！」
涼は眉をひそめながら、口角をわずかに吊り上げる。
「……勝手なこと？」
すっと立ち上がり、美紅の目の前まで歩み寄る。
「お前の借金、俺がまとめて払ってやったのに……まずは、ありがとうが先じゃねえの？」
喉が凍りついたように言葉が出ない。

「俺は夢を叶えてミュージシャンになって……三百万くらいポンと出せるようになった」
耳元に、熱を帯びた低音が落ちる。
「美紅は……偉そうに弁護士になるなんて言って、結局は風俗嬢。……笑えるよな」
胸の奥を鋭く抉られる屈辱。
涙に潤んだ瞳で睨み返した瞬間、涼の手が美紅の後頭部を掴んだ。
「んむっ……！？」
唇を強引に塞がれ、息が止まるほど深く口内を貪られる。
舌がねじ込まれ、上顎を乱暴に擦り上げ、喉奥まで押し込まれた。
逃れようと背を反らしても押さえつけられ、顎をこじ開けられる。
「んっ……ぐっ……んんぅ……！」
唾液が溢れ、口端からとろりと零れ落ちる。
涼の舌が奥深く根こそぎかき回し、吸い上げるたびに酸素が奪われ

頭が真っ白になっていく。
鼻先に涼の荒い吐息がかかり熱が口内でどろどろに混ざり合った。
ようやく唇が離されたとき、唾液が二人の間に淫らな橋をかけた。
「はぁっ……はぁっ……」
交錯する呼吸が熱く絡み合う。
涼は口角を歪め、吐き捨てるように囁いた。
「今日のオプションに……ディープキスも乳首舐めも、しっかり入れてあるからな」
乱れた息の余韻を残したまま、肩を突き飛ばされ、美紅はベッドに沈み込む。
次の瞬間、ブラウスが荒々しく引き裂かれ、ボタンが弾け飛んだ。
「きゃっ……！」
露わになった胸に、涼の熱い視線が注がれる。
「やめっ……！」

必死に胸を腕で覆うが、その上から顔を押しつけられる。
「んひゃあっ……！」
硬く尖った乳首に舌が絡みつき、ちゅうっ、じゅるっと淫猥な音を立てながら吸い上げられる。
舌先で転がされ、舐められ、唇で挟まれ、強く吸い込まれるたびに背筋がびくんと跳ねた。
「やぁっ……んっ……そこ……っ！」
合間に歯で軽くカリッと噛まれ、甘い痛みに涙がにじむ。
「嫌がっててて……身体は正直だな」
鼻で笑いながら、もう一方の乳首を指でぎゅっと捻り上げる。
「やぁっ……ダメっ……！」
舌と指に同時に嬲られ、乳首は赤く硬直していった。
「……お前、むちゃくちゃ感じやすい身体じゃねえか」
嘲りと共にショーツが乱暴に剥ぎ取られる。

ひやりとした空気と涼の熱い吐息が重なった。
「やっ……やめてぇ……っ！」
必死の声を無視し、割れ目に舌が這い込む。
じゅるるっ……ちゅぷっ……れろっ、じゅぶっ……
粘りつく舌が秘裂を上下になぞり濡れ広がった花弁を舐め尽くす。
尖った舌が蜜をすくい取りながらくちゅくちゅと擦りクリトリスに強く吸い付いた瞬間――
「ひあぁぁっ……だ、ダメっ……そこ……っ！」
腰が勝手に浮き、シーツを握る指が震えた。
懇願の声を上げながらも甘い痺れが脳髄を突き抜け、抗えぬ快楽が全身を貫く。
「あぁっ……あぁっ……ダメっ……っ、イッ……イくぅっ……！」
悲鳴とともに身体が痙攣し、太腿が涼の頭をぎゅっと挟み込む。
「ははっ……誰に開発されたんだよ、美紅。……舐めただけですぐ

イくなんてな」
鼻先を蜜で濡らしたまま嘲るように笑い、濡れた秘部を見下ろす。
「……で、誰の趣味でこんなパイパンにしてんだ？」
「っ……」
羞恥に顔を背け、震えるばかりで何も言えない。
「……都合悪くなると黙るのか。あんなに威勢のよかった美紅はどこ行ったんだ？」
濡れた唇を舐めながら、股間を突き出し顎で指示する。
「まあいい……舐めろ」
冷えた声が命じると、美紅は唇を噛み、羞恥に頬を染めながら膝をついた。
震える吐息を洩らし、顔を近づけると、熱と汗と雄の匂いがむわりと鼻をついた。
「っ……」

恐る恐る舌先を伸ばし、先端をぺろりと舐める。
とろりとした液が舌に絡み、喉の奥がきゅっと縮んだ。
細い舌が表面をなぞるたび、涼の腹筋がわずかに震える。
「……ちんたら舐めてんなよ……奥まで咥えろ」
ぐいっと髪を掴まれ、頭を強引に押し込まれる。
「んぶっ……！　んぐぅっ……！」
唇が大きく裂け、喉奥が無理やりこじ開けられていく。
えずきと唾液が絡み合い、生々しい音が室内に響き渡る。
涼は美紅の頭を前後に揺さぶり、勝手に口を使わせる。
「ごぶっ、ごぶっ、ごぼっ……っ！」
喉奥で泡立つ音、顎から滴る唾液が首筋を濡らした。
「……あぁ……喉で締められると……たまんねぇな」
涼の吐息が荒く漏れる。
苦しくて視線を逸らそうとした瞬間、さらに髪を引かれる。

「俺を見ろ。……目を逸らすな」
涙で霞む視界の中、美紅は必死に上目遣いで涼を見上げた。
潤んだ瞳が涙でにじみ、濡れた頬が赤く染まる。
「じゅぽっ……じゅるっ……！　んぐっ、んんっ！」
舌は根元まで押しつけられ、唇の端から白い泡が飛び散る。
「……っ、出すぞ」
涼の声が低く震え、腰の突き上げがさらに鋭さを増す。
「んぶっ……！　んんんっ……！」
喉奥を抉るように打ち込まれ、次の瞬間、熱が一気に迸った。
濃厚な精が喉奥に注ぎ込まれ、呼吸すら奪われる。
必死に飲み下すが、溢れた白濁が口端から顎へ伝い落ちた。
「そうだ……顔を上げろ。そのまま俺の目を見ながら飲み干せ」
涙に濡れた瞳で涼を見上げながら、ごくごくと喉を鳴らし、必死に精液を受け止める美紅。

「……くくっ。やっぱおもしれえわ。ガリ勉優等生だった美紅が今じゃ俺専用の喉オナホか」
涼の冷笑が降り注ぐ。

「……じゃあ今から、オナニーしろ」
「え……？」
震える声を漏らした美紅の前に赤黒く濡れ光る大ぶりの電動バイブが投げつけられた。
「……自分でイッてみせろ」
「そ……そんな……っ」
美紅は涙をにじませ、唇を噛みしめた。
「……早く」
低く鋭い声が突き刺さる。
「客が命じてんだ。……言うこと聞け」

冷酷な眼差しに逃げ場を塞がれ、美紅は小さく嗚咽を洩らしながら震える指先を伸ばした。
「そうだ……最初からそうすりゃいいんだよ」
涼の冷笑が浴びせられる。
ずっしりと重いそれの先端を恐る恐る秘部へ押し当てる。
「もっとだ。……奥まで突っ込め」
「っ……いや……っ」
「命令だ。早くやれ」
震える細い手で、なんとか呑み込ませようとする。
しかし入口は強張っていて、先端が割れ目をぐりぐりと押し広げるばかりでなかなか入らない。
「おい……なにモタモタしてんだよ」
苛立ちを含んだ声が降りかかる。
次の瞬間、涼の足先が電動バイブの根元を無造作に蹴り上げた。

「ひぁああああッ……！」
鈍い音を立てて、硬い異物が一気に奥深くまで突き込まれる。
不意の衝撃に全身が痙攣し、涙がぶわっと弾け飛んだ。
「ほら、入ったじゃねえか。……簡単だろ」
涼は椅子にふんぞり返り、腕を組んだまま冷笑する。
その瞬間、膣内で電動バイブがぶるるるっと勝手に暴れ出す。
「ひぁああっ……っ！」
粘膜を内側から擦り立てられ膣壁を容赦なく押し広げられる屈辱に
美紅の身体はびくびくと跳ねる。
腰が震え、ぐちゅぐちゅと濡れた音がいやらしく部屋に充満した。
「……おら、モタモタしてねえでさっさと自分で動かせよ。クリも
一緒にいじるんだぞ」
冷酷な命令が飛ぶ。
羞恥に頬を真っ赤に染めながら、美紅はバイブを握り、震える指で

クリトリスを擦り始めた。
「ひゃあっ……ん、んぁぁぁ……っ！」
電動で勝手に膣奥をかき回されながら、自ら前後に突き動かす。
クリトリスをいじる指先は熱に痺れ、腰はがくがくと反り返る。
「そうだ……もっと大きく脚を広げて俺に見せろ」
低い命令に逆らえず、羞恥に震えながら脚を大きく開き直す。
秘部から、ぐちゅっ、じゅぶっ、と濡れた音が弾け、ローションと蜜が糸を引いた。
「やっ……ダメ……っ、イッ……ちゃう……っ！」
嗚咽混じりの悲鳴とともに腰が反り、膣がバイブをぎゅうぎゅうと締め付ける。
ぶるぶると振動しながら奥を叩く異物に、蜜があふれ、シーツをぐっしょり濡らした。
「おら、しっかりクリもいじれよ！」

「あぁぁっ……ダメ……っ、もうイッ……っ！」
涙と涎で顔をぐちゃぐちゃに濡らし、美紅は絶頂に崩れ落ちる。
涼は冷ややかな視線を投げ下ろし、鼻で笑った。
「ははっ……笑えるな。中学のとき俺の夢をバカにしてた美紅が……今じゃバイブ突っ込んでクリいじりか！」
耳を刺す嘲りに、羞恥と屈辱がさらに深く刻まれる。
それでも身体は快楽に抗えず、膣奥で暴れ続ける異物を締め付け、小刻みに痙攣を繰り返していた。
「……惨めだな、美紅？」
冷酷な声がとどめのように突き刺さる。
「……あーあ、お前のパイパンマンコ、ぐっちゃぐちゃじゃん」
熱を帯びた亀頭が割れ目に押し当てられ、ぬるぬると蜜を絡ませながら上下に擦りつけられる。
いやらしい水音が部屋に広がり先端がクリトリスをかすめるたび